

国立国語研究所学術情報リポジトリ

21世紀のポライトネス理論研究の可能性：
ディスコース・ポライトネス理論の新展開

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003020

2019d 宇佐美まゆみ(2019)「21世紀礼貌現象研究的可能性—話語礼貌理論の新展開—」
 (原文「21世紀のポライトネス理論研究の可能性—ディスコース・ポライトネス理論の新展開—」(李瑤 訳)、『日語学習与研究』204巻第5号、23-34.

21世紀のポライトネス理論研究の可能性—ディスコース・ポライトネス理論の新展開—

宇佐美まゆみ
 (国立国語研究所)

和文要旨：

本稿では、1978/1987年にBrown & Levinsonによって提出されたポライトネス理論と、それが巻き起こした論争などを簡単に振り返り、改めて、1990年以降、「ポライトネス記述研究」と「ポライトネス理論研究」に二極化したポライトネス研究の約40年の動向をまとめる。「ポライトネス記述研究」とは、各個別言語におけるポライトネス、敬語体系や敬語運用の研究、それらの比較文化対照的研究などを指し、「ポライトネス理論研究」とは、言語文化によって多岐・多様に渡るポライトネスの「実現(realization)」の基にある動機によって、異なる言語文化におけるポライトネスの実現を統一的に説明、解釈、予測しようとする「理論(theory, principle)」の構築に重点をおいた研究である。それぞれの意義と役割、問題点などを確認した上で、本稿では、現在、急激に発展している人工知能研究における「対話システム構築」のための対話研究とも関連づけながら、「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美, 2001a, 2002, 2003, 2008, 2017)の21世紀の新展開と今後の可能性について論じる。

キーワード：ポライトネス理論；ディスコース・ポライトネス理論；フェイスワーク；フェイス侵害度；フェイス充足度；フェイス均衡原理；ローカル／グローバル

1. はじめに

Brown and Levinson(以降, B&L)が、1978/1987年に、ポライトネス理論を普遍理論として提唱してから、早40年が過ぎた。1978年の長い論文が発表されて以降、この理論が、「普遍理論」を標榜しただけに、様々な文化圏からの反論も渦巻き、その反響や影響は、言語学(語用論)のみならず、社会学、文化人類学、心理学、コミュニケーション論などの関連分野にも及んだことは、周知のとおりである¹。1990年代には、非印欧言語、特にアジア言語の研究者から、B&Lの理論が西洋中心的でアジアの言語には当てはまらないとの批判がなされた。しかし、これらアジア言語の研究者から出された批判の中には、妥当とは言えないものが少なからずあった²。非西欧の視点、アジアの視点を打ち出していくことは、極めて重要であるが、それをより説得力をもって行うには、より堅固なデータや根拠を基に、論理的に主張する必要がある。1990年代のアジア言語の研究者からの批判は、B&Lの理論自体の根本的な誤解に基づくものが多く、そのため議論は平行線を辿らざるを得な

った。その大きな原因の一つは、各個別言語における敬語体系や敬語運用の原則の研究、それらの比較文化的研究などの「ポライトネスの記述研究」と、言語文化によって多種・多様な広い意味でのポライトネスの「実現(realization)」の基にある動機を捉えることによって、異なる言語文化におけるポライトネスの実現を統一的に説明、解釈、予測しようとする「理論(theory, principle)」の構築に重点をおいた「ポライトネスの理論研究」とが、主に、記述的アプローチをとる研究者たちによって、区別されることなく論じられてきたことによる。その後、2000年代に入ると、日本語研究者による B&L の理論の誤解に基づく批判への批判や、大筋として B&L を支持する日本語とポライトネスに関する英語による著書や論文も、増加していった (Fukada & Asato, 2004 ; Fukushima, 2002; Pizziconi, 2003; Usami, 2002; 等)。

こうした経緯を経て、1970年代にロビン・レイコフによって語用論的関心事として取り上げられ、リーチによって語用論的「公理」としてまとめられ、B&Lによって、フェイスを核とするより包括的な理論として体系化された「ポライトネス研究」は、2000年代に入って、個別言語、比較文化的視点を中心とする「論証記述アプローチ (discursive approach)」と、人間の社会的相互作用としての言語行動におけるポライトネスをいかに理論化するかという観点からの「普遍理論追究アプローチ (theoretical approach)」とに2極化していった (宇佐美, 2008)。本来、記述研究と理論研究は相互に刺激しながら発展することが望ましいが、残念ながら、「ポライトネス研究」においては、それがうまく機能しないまま 40 年が過ぎようとしていると言っても過言ではない。一方で、目的が異なる 2 種類のアプローチが 2 極化することによって、それぞれの研究が、かみ合わない議論に陥ることなく、新たな展開を見せていると建設的に捉えることも可能であろう。

本稿では、これらの状況を踏まえた上で、「ポライトネス記述研究」と「ポライトネス理論研究」を明確に区別した上で、主に、普遍理論構築の観点から、B&L のポライトネス理論が提唱されて以降、この理論に関して行われた議論のエッセンス、他の研究者によって代案として提出された他の枠組みやアプローチなどを簡単に概観する。その上で、B&L の理論のいくつかの問題点を克服すべく構想されてきた「ディスコース・ポライトネス理論 (以降、DP 理論)」 (宇佐美, 2001a, 2002, 2003, 2017) の最新の展開を紹介する。

2. 普遍理論構築の観点からの B&L のポライトネス理論の修正・展開ーディスコース・ポライトネスの観点から

B&L の理論に対する批判については、主に、論証記述的アプローチを取る研究者の誤解に基づくものが多かったことについては、指摘してきた (Usami, 1999, 2002, 2006a, b; 宇佐美, 2001, 2002)。ここでは、改めて、「ポライトネス理論研究」、つまり、普遍理論の構築を目的とするということに的を絞って、B&L の理論の問題を再整理する。

論証記述的アプローチ派が、「ポライトネス」という用語や概念の共通理解の必要性を主張したあげく、その限界を認めて、個別事例の記述を極める方向に進んだのに対して、普遍理論追究派は、B&L によって「ポライトネス」という言葉で表わされた概念を超えて、言語行動に焦点をおきながらも、「人間の社会的相互作用」、「対人コミュニケーション」の理論化に迫ろうとしてきた。普遍理論追究派の研究者は、「適切性 (appropriateness)」、「対

人配慮(consideration)」、「バランス修復活動(balance restoring activities)」、「ディスコース・ポライトネス(discourse politeness)のように、人間の社会的相互作用をいかに体系化するかという観点から、研究者によって核とする概念や用語は違えど、B&L が銘打った「言語的ポライトネス(linguistic politeness)」には留まらない「対人コミュニケーション理論」のモデル化へと展開してきている。

普遍理論追究派が共通して主張していることは、「ポライトネスについての規範、すなわち、いつどのような状況で、誰が誰に対して、どのような言語行動をすべきかということ」は、文化によって様々な多様性を見せるが、話し手が、そのような規範と自分の意思を考慮して、どのような言語行動を選ぶかということの背後にある動機と、実際の言語行動の選択のメカニズムは、普遍的である」ということである。普遍理論追究派の目的は、「ポライトネスの背後にある動機とそれを実現する言語行動の選択のメカニズム」を体系化することにある。この点も含めると、B&Lの理論の問題点の中で、今後への課題として重要である点として、以下の10点があげられる(宇佐美, 2008)。

- (1) ポライトネスは、その逆ともいえるインポライトネスとともに、扱われるべきである。
- (2) (1)を考えると、「ポライトネス理論」という位置づけも、「ポライトネス」という概念の定義も拡大する必要がある。また、その概念に応じた新しい用語を提出する必要があるかもしれない。
- (3) 「人間の対面的相互作用」の原則の理論化のためには、1, 2のターンのやりとりを超えた、より長い談話レベルの相互作用を対象とする必要がある。
- (4) (3)は、おのずと、「(自然)会話データ」を主要なデータとすることの重要性を示す。
- (5) 相手の「フェイス保持」だけでなく、自分の「フェイス保持」の観点も、より明確に理論に組み込む必要がある。
- (6) ポライトネスは、フェイス侵害行為(Face Threatening Act: FTA)のFT度軽減行為としてだけでなく、「フェイス充足行為(Face Satisfying Act: FSA)」も加えて、よりマクロな観点からも捉える必要がある。
- (7) 発話を行う際に、発話をやわらげるFT軽減行為としてだけでなく、FTAを行ってしまった後に、それを埋め合わせる言語行動もポライトネスとして捉える必要がある。
- (8) また、長い会話において、一方の話者の、相手に対する「フェイス侵害行為」のFT度軽減行為が足りない、或いは、全くなかった場合に、同じ会話の中で、今度は相手が、同定度と見積もる「フェイス侵害行為」を行って、「フェイスの均衡」を保とうとするということもあるという現象も統一的に説明することが、インポライトネスも含むより包括的なポライトネス理論には必要である。
- (9) さらに、関係が継続する相手との会話におけるやりとりにおいては、一回の会話だけでなく、より長いスパンのコミュニケーションを想定し、一つの会話におけるフェイス侵害度の不均衡を、次の会話において解消することも可能であるという、よりマクロな視点も取り入れる必要がある。それが「フェイス充足行為」の動機ともつながる。

(10) あくまで、「ポライトネス効果」は、聞き手の側からの認知である点を明確にし、「実現されたポライトネスの解釈」の問題として、聞き手の解釈過程を理論に組み込む必要がある。

DP 理論の新構想は、上記(1)～(10)すべてに対応するものとして提示された(宇佐美, 2008, 2017)。但し、(2)の新しい「用語」の創造については、これまでの研究史を踏まえ、DP 理論が B&L のポライトネス理論から展開してきたものであることを公平に示すため、「ディスコース・ポライトネス」という形で、「ポライトネス」という用語を維持する。しかし、今後は、「インポライトネス」の問題を、マイナス・ポライトネスとして位置づけ、「インポライトネス」の部分の実証的研究も拡大していく必要がある。また、(10)については、それだけで膨大な課題であるため、今後は、多くの研究者の協力によって深められるべき課題である。ただ、次節では、聞き手の解釈過程が、「DP 理論」の中で、どのように位置づけられるかということを示す。それは、広い意味の、人間の言語使用の理解と産出の両方を含むコミュニケーションのメカニズムの中で、ポライトネス、すなわち、相手のフェイスへの配慮が、自分自身のフェイスの保持の欲求との関係の中で、いかに決定されるかということの位置づけを示すものでもある。

3. 「ディスコース・ポライトネス理論」の新展開

DP 理論は、よりマクロな観点からは、人間の言語使用(産出と理解)、すなわち対人(言語)コミュニケーションのメカニズムを念頭において、特に、「ポライトネス(インポライトネス)」の観点から、その原則を体系化しようとするものである。より具体的には、「ポライトネス」を「円滑な人間関係を確立・維持するための対人コミュニケーション」として、談話レベル、グローバルな観点から捉えた上で、ローカルな観点からは、話し手の言語行動の解釈が、話し手、聞き手の間で一致しているかどうかという「見積もり差(De 値)」という観点を導入する。また、いわゆるインポライトネス(マイナス・ポライトネス)も同一の枠組みで扱い、その全体のメカニズムを、ミクロ・マクロ両方からの「フェイスワーク」という観点から、体系的に説明しようとするものである。

アプローチの方法としては、どこかにあると想定される「真実」を解明し、記述していくという捉え方ではなく、明確に存在する「事実」をしっかりと捉え記述し、その事実をいかに体系的に説明できるかという観点から、科学的概念や用語を援用する。その一つの方法が操作的定義³である。また、その体系は、なるべく少ない原則で、できるだけ多くのことを説明できるものを理想とする。

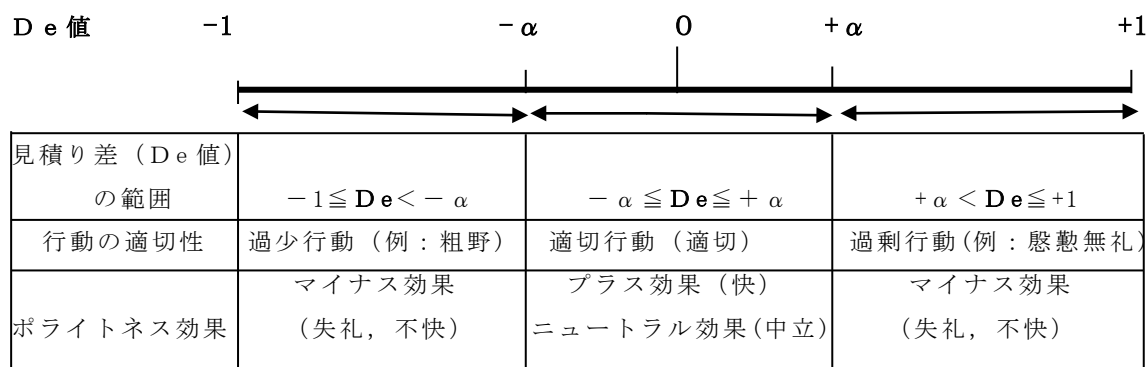
本稿では、一連の実証的研究(宇佐美, 1993, 1995, 2001b; Usami, 1999, 2002 等)の成果を踏まえた上でまとめられたディスコース・ポライトネス理論の展開(宇佐美, 2017)に、さらに、新たに具体化した点を加えた新構想を紹介するものである。

3.1 DP 理論の骨格と主な特徴のまとめ

DP 理論の詳細の説明は避けるが、次のページに、DP 理論の全体像を簡潔に示している図を、(宇佐美, 2008)より、再提示しておく(図1)。この図1は、DP 理論のダイナミッ

クな特徴が一目でわかるようになっている。また、あわせて、以下に、DP理論がそれ以前のポライトネス理論と異なる点を中心に、DP理論の特徴をまとめておく。その上で、次節で、今回新たに提示する「フェイス侵害度見積もりの公式」の修正案を提示する。

- (1) ポライトネスを、「言語行動におけるいくつかの要素がもたらす機能のダイナミクスの総体」として談話レベルから捉える。そして、そのように総体として捉えたポライトネスを「ディスコース・ポライトネス」と呼んで、「文／発話レベル」のみから見たポライトネスと区別する。
- (2) 「基本状態」という概念を導入し、(1)で説明した総体としての「ディスコース・ポライトネス」を、当該談話の「基本状態」という「媒介変数(parameter)」として捉える。それとともに、同じ活動の型における数多くの「談話」において、ディスコース・ポライトネスを構成する各々の要素の「当該談話における構成比率」の平均的なものや、「各々の要素の生起率」の平均的なもの、「典型的な談話展開パターン」なども、「それぞれの言語行動や談話展開パターンの基本状態(デフォルト, 典型)」として捉える。
- (3) ディスコース・ポライトネス理論では、話し手が見積もる「ポライトネス・ストラテジー」と、「話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵害度についての聞き手の見積もり」の「差(De 値)」によって引き起こされる「聞き手側から見た認知」としての「ポライトネス効果」を区別して考える。見積もり差には、以下の3種がある。
 - ① 話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵害度についての「見積もり(期待)」のずれ
 - ② 「フェイス侵害度の見積もりに応じて選択されたストラテジー」のずれ
 - ③ 「談話の基本状態」が何であるかについての「見積もり(期待)」のずれ
- (4) 相対的に生まれる「ポライトネス効果」は、話し手と聞き手のこの3種の「見積もり(期待)」のどれか、或いは、すべての「ずれ」の方向と大きさの聞き手側からの認知によって、「プラス効果」、「ニュートラル効果」、「マイナス効果」のいずれかになる。「プラス効果」、「マイナス効果」は、聞き手が、心地よいか、不愉快かという観点であるが、「ニュートラル効果」とは、「ポライトネス効果」の観点からは、ニュートラル、つまり、特に心地よいというわけでもなく、不愉快、失礼に感じるわけでもない、ということである。この場合、その「有標行動」は、「話題転換」、「ある主張の強調」、「注意喚起」などの「言語的談話効果」(宇佐美, 2001a, 2002)を生むと考える。
- (5) 「インポライトネス効果」は、この3種の「話し手と聞き手の見積もり(期待)差」のいずれか、或いは、すべてにおける「ずれ」が、聞き手から見て「許容範囲($\pm\alpha$)」内にあるか否かによって生じる。
- (6) ある有標行動(一発話レベル・談話レベル)の「ポライトネス効果」は、当該の談話やそれを構成する要素それぞれの「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の離脱の度合い(有標性)に応じて、相対的に生まれてくるものである。
- (7) ディスコース・ポライトネス理論は、この「相対的效果」という捉え方を理論の核とする。



見積り差 (Discrepancy in estimations: De 値): $De = Se - He$

Se: 話し手 (Speaker) の「見積り (estimation)」(以下の*参照)。仮に, 0 から 1 の間の数値で表すものとする。

He: 聞き手 (Hearer) の「見積り (estimation)」。仮に, 0 から 1 の間の数値で表すものとする。

α : 許容できるずれ幅

* 「見積り (estimation)」には, 以下の 3 種がある。

- 1 話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵害度についての「見積り (期待値)」
- 2 「フェイス侵害度の見積りに応じて選択されたストラテジー」の「見積り (期待値)」
- 3 「談話の基本状態」が何であるかについての「見積り (期待値)」

図1 「見積り差 (De 値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」

3.2 DP 理論を用いた研究と今後の展開

幸いにも DP 理論を枠組みとしたり, 解釈概念として利用した論文は, 増えつつある (母, 2008, 2011, 2014; 王・聞, 2015; 李, 2014; 野村, 2017 等)。特に, 中国人研究者による日中対照研究が盛んである。3.1 の (2) にまとめた「基本状態」という概念を用いて, 日中の基本状態の違いを同定し, そこから起こりうるマイナス・ポライトネス効果を予測し, 日本語教育に適用しようとするものなどである (母, 2008)。日常よく見られ, 且つ, 「フェイス侵害度」が高いため, 注意を要する「依頼」, 「断り」, 「謝罪」, 「反論」などの「発話行為」を取り上げたものが比較的多い (時, 2014; 母・鄧, 2010; 趙, 2004; 張・熊, 2017; 等)。今後の展開としては, これまで話し手のストラテジーという観点を中心に捉えられてきた「ポライトネス」を, 「聞き手」の観点からも捉えていくことが必要となってくる。例として, 以下のような研究が, 期待される。

- ① 話し手と聞き手の「見積り差」を質問紙調査やインタビューなどから明らかにし, 聞き手の観点からの「ポライトネス効果」について, 考察を深めるもの。

- ② 意図的，非意図的「マイナス・ポライトネス」効果について，より具体的に分析するもの。
- ③ 時間の概念を含めた「フェイス均衡原理」の記述と分析方法を精緻化していくもの。
- ④ 母語話者同士の母語場面ではなく，「接触場面」の「基本状態」をどのように捉え，記述していくかを考えるもの。
- ⑤ 「対話システム構築」が進みつつある 21 世紀の発展の先取りとして，「人間と人工知能 (AI)」との対話の「基本状態」を同定するとともに，人間と AI との共生を想定した上で，ポライトネスを考えていくこと。

3.3 DP 理論の 3 つの新側面

DP 理論の新構想で整理し，新たに追加した点は以下の 3 点である。

- ① 2 種類の人間関係のあり方の想定
- ② フェイス侵害度見積もりの公式の修正
- ③ 「時間」を考慮した「フェイス均衡原理」を導入

以下では，この 3 つの新側面について，最も新しい「フェイス侵害度の見積もりの公式」の修正を中心に説明する。

3.3.1 2 種類の人間関係の想定

DP 理論では，それを適用する社会生活における人間関係を，その言語使用への影響という観点から，以下の 2 種類に分けて考える。

- a 人間関係を確立・維持する必要性，希望，見通しがある関係(家族，職場，近所等，通常，交友関係があり，また，初対面でもその後の関係継続の必要性，希望，見通しがあるもの。誰かの紹介によるものなどを含む)
- b 人間関係が継続する必要性，希望，見通しのない関係(エレベータに乗り合わせた人同士等)⁴

DP 理論は，この双方を視野に入れ，行動原理の体系化を目指しているが，まずは，a の関係にある人同士のやりとりを前提として DP 理論を展開する。

3.3.2 フェイス侵害度の見積もりの公式の再検討

これまで B&L の「フェイス侵害度の見積もりの公式」($W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$) のパラメータについて，様々な言語で質問紙調査による検証が行われた。そのような中，P 要因の影響については，B&L の公式を支持する結果が比較的多かった。また， R_x 要因についても，次に安定した結果が出ているが，一方で，様々な要因を一括して R_x 要因とすることへの懸念も生じている。これらの要因の中で，最も相反する結果が出ていたのは D 要因である。あまり親しくない人に対してよりポライトになるという結果と，近しく好きな人によりポライトになるという相反する結果が出ており，そこから，「情緒 (affect)」や，「好み (liking)」も要因に加える必要があるのではないかというような指摘もあった (Slugoski & Turnbull, 1988 等)。公的，私的という「状況 (Situation)」要因を追加することを提案したものもある (趙, 2004)。

前者については、Dの要因というよりは、一概にポライトになると言っても、ポジティブ・ポライトネスのほうか、ネガティブ・ポライトネスのほうか、その割合を考慮に入れる必要もあるだろうし、むしろ、D要因より上位にあって重みの見積もりに作用するのは、3.3.1で述べたような、今後の人間関係の継続性や利害関係などに関係してくるものと考えられる。B&Lの理論では、そこまでは想定せず、しかも、一発話行為レベルの見積もりを扱っているため、今後、DP理論では、その点を発展させる。現段階では、その新展開の基礎となるよう、まずは、B&Lの理論の微修正を次の3.3.3.で提示する。

B&L(1987:74-84)では、D, P, Rの社会的変数は、そのアウトプットを固定的、決定的に決めるものではなく、大まかな傾向を把握するために柔軟に捉えるものとして設定されていることが丁寧に説明されている。批判や指摘の中には、そのことを踏まえていないものも多い。そのため、ここでは、B&Lの主張を改めて、簡単にまとめ解説する。その上で、筆者の修正点を示す。

B&L(1987:77-78)では、ある特定の文化における、ある特定のフェイス侵害行為の領域におけるネガティブ・フェイスの侵害度の重みづけの序列には、以下のような状況要因を考慮する必要があるとして、次のようにまとめている(抄訳、補足説明は筆者による)

$R(x)$ の値は、ある特定の文化による(i)によって決定される。

- (i) (a)時間なども含む「サービス」を求めることによって相手にかける負荷度の序列
- (b)情報や、配慮ある表現なども含む「もの」を求めることによって相手にかける負荷度の序列

ただし、(i)に関連してくる作用として、以下のことがある。

- ①ある行為(x)が、法的、道義的、職務的な意味で、行為者の義務になっているとき。また、求められたある行為(x)をすることによって、行為者が喜びを得る場合は、その負荷度は下がる。
- ②行為者が、ある行為(x)をすべきでないか、或いは、(簡単には)できない理由がある場合は、その負荷度は上がる。

その他、B&Lでは、D, P, R要因は、「状況依存性」が高いものであるので柔軟に捉えるのが妥当であると様々な形で繰り返し述べられている。例えば、同国人であるが面識のない者同士が、何か話す機会を初めて持った時、それが自国での場合は、お互いのD値は、高いことが予想できる。しかし、もし同じ二人が、その国の人がほとんどいないような旅先で出会ったとしたら、その状況下では、相対的にD値が低くなり、まるで、友人のように話すかもしれないというような状況の例などである。

3.3.3 フェイス侵害度の見積もりの公式の修正

筆者は、これまで、このような公式では、変数を増やす方向の修正は、幾多もあり得る

複雑な諸要因の小さな影響に気を取られ、重要な主要変数のより大きな影響力が過小評価されがちになる懸念があるため、D, P, R という主要要因の数は増やさず、現在の主要要因の中で、それぞれの変数の値の見積もりを柔軟に考えるのがよいと考えてきた。しかし、今後、この公式をより本格的に数量化して人工知能研究における対話システム構築などに生かすことも念頭において、次のような修正案を提案することにした。

上記に見たように、B&Lの理論では、 $W(x)=D(S,H)+P(H,S)+R(x)$ の基本公式における $R(x)$ を決定する要因を(i)としてまとめた上で、(i)の $R(x)$ の見積もりの序列を上下させる要因として、(ii)の(a),(b)を追記している。

新DP理論の一環としては、これに加えて、 $R(x)$ の見積もりを上げる要因として、以下の2つを追加する。これらは、いずれもある行為の「改まり度 (Formality)」に関することである。

- ①ある行為(x)が、公的な、或いは、改まり度が高い状況で行われるとき。
- ②第三者が、声が聞こえる範囲にいるとき。

新DP理論では、以上の修正点を反映させて、B&Lの「フェイス侵害度見積もりの公式」におけるある特定の文化における $R(x)$ の値の決定方法について、以下のようにまとめる。

$R(x)$ の値は、ある特定の文化における(i)によって決定される。

- (i) (a) 時間なども含む「サービス」を求めることによって相手にかかる負荷度の序列
- (b) 情報や、配慮ある表現なども含む「もの」を求めることによって相手にかかる負荷度の序列

ただし、(i)に関連してくる作用として、以下のことがある。(括弧内は、筆者の用語)

- ① ある行為(x)が、以下の状況にあるとき、その負荷度は下がる。
 - ①-1 法的、道義的、職務的な意味で、ある行為(x)が行為者の義務になっているとき。(当然性: legitimacy)
 - ①-2 求められた行為をすることによって、行為者が喜びを得る場合。(積極的意欲・意思: willingness)
- ②ある行為(x)が、以下の状況にあるとき、その負荷度は上がる。
 - ②-1 公的な場面、或いは、改まり度が高い場面で行われるとき。(改まり度: Formality)
 - ②-2 第三者が、声が聞こえる範囲にいるとき。(偽改まり度: pseudo-formality) ⁵

つまり、図書館員に「本を借りたい」と依頼するのは、友人に本を借りることよりも「当然性(正当性)」が高いため、フェイス侵害度は相対的に低くなる。また、以前から、本人がやりたいと申し出ている仕事を部下に依頼するときも、部下がその仕事を喜んで行うことが予測される場合は、 R_x の値は相対的に小さくなると考えるのである。

また、同じ「本人がやりたいと申し出ていた仕事を、部下に依頼する」場合も、会議のような公的な場でそれを行う場合は、改まり度が高くなるので、 $R(x)$ の値は上がる。また、非公式に依頼する場合も、近くに第三者がいる場合は、改まり度が少し高まり(偽改まり: Pseudo-formal)、よって $R(x)$ の値も少しあがるだろう。つまり、人は、話しかける相手や状況によってポライトネス・ストラテジーを選択するが、第三者が、声が聞こえる範囲の傍にいる場合は、いわゆる発話の改まり度は高くなると捉える。これは、電車の中などで、周りの人に声が聞こえる状態なども含むので、最初の公的場面か私的場面かという観点や通常の改まり度と区別して、「偽改まり度: pseudo-formality)」と呼ぶ。

新 DP 理論におけるもう 1 点の修正点は、B&L でも言及され、これまで指摘されることはあっても、誰も体系的な形で理論に組み込むことはなかった「話し手自身のフェイス」の要因を、「話し手のフェイス保持の欲求度」と名づけ、これまで「相手へのフェイス侵害度」の重みのみに基づいて算出されるとしていた「フェイス侵害度見積もりの公式」に加えるという点である。

「聞き手のフェイス」をどの程度尊重するか「の度合い」であるとも言える現理論の「フェイス侵害度」(W_x)から、「話し手自身のフェイス保持の欲求度 (Desire for Saving his/her own Face: DSF)」を差し引いて、当該の発話のフェイス侵害度 (W_x)を見積もると考える。例えば、謝罪は、相手のフェイス侵害度を和らげるストラテジーであるが、一方で、話し手自身のフェイスを侵害することにもなる行為である。この時に、どのくらい「自分自身のフェイスを保持したいか」という度合いが、相手に対するフェイス侵害度の合計 (W_x)から差し引かれると考えるのである。つまり、相手のフェイス侵害度 ($W(x)$)をどのくらい軽減するかは、自分のフェイス保持の欲求度が高ければ、相対的に低く見積もられることになる。つまり、いわゆる「ポライトネス」は、少なめになるのである。

これを公式で表現すると以下のようなになる。

$$W(x) = D(S, H) + P(H, S) + R(x) - DSF(S)$$

D:Distance 話者間の社会的・心理的距離⁶

P:Power 聞き手の話し手に対する力

Rx:Rank of impositions ある特定の文化におけるある行為 (x) の負荷度の序列

DSF(S): Desire for Saving his/her own Face

3.3.4 「フェイス均衡原理 (Face-balance principle)⁷」という捉え方の導入

宇佐美 (2008, 2017) では、B&L が理論のベースとした「フェイス侵害行為 (Face Threatening acts:FTA)」だけでなく、「人間関係の中・長期的な継続の必要性、希望、見通しの有無」という、よりマクロなレベルから話者を捉え、「時間」という軸と、「フェイス充足行為 (Face Satisfying Acts:FSA)」という概念を加えた。そして、いくつかのやり取りだけに留まらないより長い会話におけるグローバルな観点と時間軸に沿って継続する人間関係から「フェイスワーク」を捉え、「フェイス均衡原理⁸ (Face-balance principle)」

を、その体系に組み込むことを説明した。これは、ある会話における話者間のフェイス侵害度の不均衡を、同じ相手との次の会話で解消することも可能であるという時間経過の観点を導入した新しい捉え方である。

DP理論では、時間軸を設定するというマクロな視点も含めて、ローカルな個別の会話のやりとりのポライトネス（フェイスワーク）を考えていく。これは、特に、日本語においては、「先日は、ありがとうございました。」というような「後日の感謝」の言葉が慣用化していることから、人間関係が継続する関係におけるポライトネスには、「時間」という観点を取り入れる必要があることを物語っている。他の言語においても、慣用表現になっているかどうかは別にしても、「この間は、ひどいことを言ってごめん」というような発話は十分あり得ることである。つまり、ある程度日時が経過した後に、先日のフェイス侵害を埋め合わせるような言語行動を行うことはよくある。このような観察に基づき、「新 DP理論」では、時間軸を導入するとともに、継続する人間関係における「フェイス侵害行為」と「フェイス充足行為」は、中・長期的な単位で、話者間の「均衡原理」が働いていると捉える。

その具体的な捉え方の例は、宇佐美(2017)で示したが、ここでは、少しやりとりを増やしたものを提示し、以下の図2に示し、簡単に説明する。図の中の矢印の長さは、フェイス侵害度やフェイス軽減、充足度などの大きさに合わせているというイメージである。

図2に示したように、新 DP理論の「マクロ・グローバル」な部分では、新たに、「フェイス均衡状態」という概念と、「フェイス充足行為」、「フェイス充足度」という概念を導入した。図2の縦軸は、「フェイス充足度 (Degree of Face Satisfaction)」を表し、数学的な意味ではないが、象徴的な表し方として、 $0 \pm n$ （比較的小さい値、ここでは、仮に10とする）で、表わされるものとする。また、横軸は、時間（期間）の経過を示す。通常のニュートラルな状態は、「フェイス充足度」が、 ± 0 であると想定し（図2の縦軸が0の状態）、それが当該の話者間の一方である話し手側から捉えた「フェイス均衡の基本状態」とする。

さらに、新 DP理論では、マクロ・グローバルな観点から、ポライトネスを捉える際には、「フェイス侵害度」を「フェイス充足度」の観点から見ることもできる。基本的に、例えば、依頼などの「フェイス侵害行為 (FTA)」を行う際に、それを埋め合わせるために行うのが、「フェイス侵害度軽減行為」であるが、フェイス充足度が0より高い状態の時に、ある「フェイス侵害行為」を行い、それでも、まだフェイス充足度（縦軸の値）が0より高い場合は、そのFTAの「フェイス侵害度」を「マイナスのフェイス充足度」（フェイス充足度を下げてしまうもの）と呼ぶこともできる。また、その時の「フェイス侵害度軽減行為」を、「フェイス充足行為」と呼び、「プラスのフェイス充足度」として捉えることもできる。

一方、例えば、依頼などのフェイス侵害行為を行わないにもかかわらず、「ほめる」というようなポジティブ・ポライトネス行為を行った場合は、それが、フェイス充足度が0より高い状態のときに行われた場合は、「フェイス侵害度軽減行為」というよりは、「フェイス充足行為」（貯金）として捉えることができる。また、同様のほめ行為が、フェイス充足度が0より低い場合に行われた場合は、そのほめ行為は、「フェイス侵害度軽減行為」となる。また、当該のフェイス侵害度軽減行為を行った後の値が、0より高くなった場合は、

「フェイス侵害度軽減行為」と、「フェイス充足行為」（0以上になった時点から）の両方が行われたという言い方ができる。

つまり、FTAを行う際の埋め合わせ行為は、「フェイス侵害度軽減行為」であるが、FTAを行った後も、「フェイス充足度」がプラスの状態にある場合は、その「フェイス侵害度軽減行為」は、「フェイス充足行為」とも捉えられる。また、FTAを特に行わないにもかかわらず、「ほめ行為」などのポジティブ・ポライトネス行為を行う場合も、「フェイス充足行為」と捉えられる。

また、FTAを行った後の「フェイス充足度」が0より低い場合は、その値が、許容できるずれ幅（ α ）を超えて小さい場合は、インポライトネス（不快行為）が行われたと考えることができる。ただし、許容できるずれ幅を超えていなければ、継続する人間関係の場合は、このような状態も、一定期間の間は、様々な「フェイス充足行為」を行うことによって、「フェイス均衡状態」に戻したり、フェイス均衡よりプラスの状態に「フェイス充足度」を持っていき、人間関係を保つことができると考える。このような捉え方をすることによって、「インポライトネス」も、ポライトネスと同一の枠組みの中で、しかも、時間的観点も含めて捉えることができるのである。

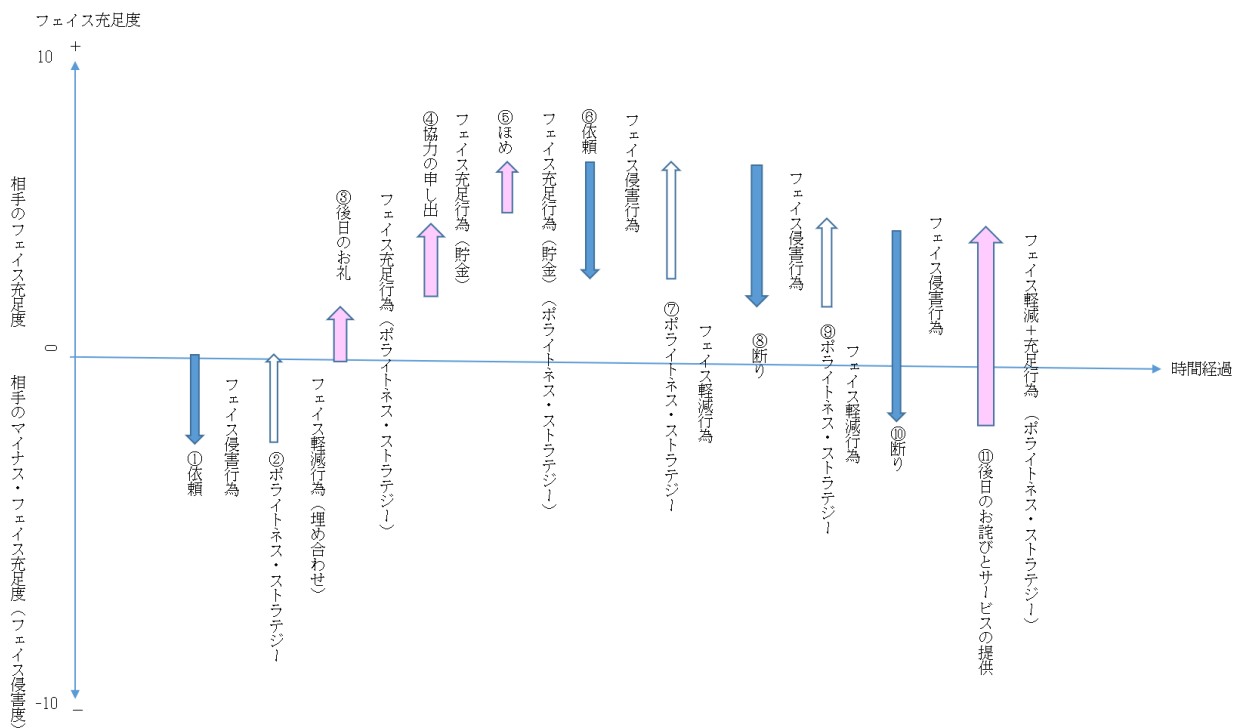


図2 マクロ・グローバルな観点から見た「フェイス均衡状態図」
—中・長期的にみた「フェイス侵害度」と「フェイス充足度」の関係

図2の①、②では、依頼というフェイス侵害行為の侵害度と同じ程度のポライトネス・ストラテジーを用いてフェイス軽減行為がなされているので、フェイス侵害度は、「0」に戻り、バランスの取れた状態に戻っている。さらに③では、依頼を受けてくれたことに対

して、「後日のお礼」を行い、④、⑤では、協力を申し出たり、ほめたりすることで、フェイス充足行為を続けて行い、例えると、相手のフェイス充足度の貯金ができている状態である。そのため、⑥で依頼する際にも、通常よりは、気を遣わずに依頼することができると思う。⑦のポライトネス・ストラテジーのフェイス軽減度も、あまり大きくなくても大丈夫であると考えられる。さらに⑧で、「断り」というフェイス侵害行為を行わざるを得なかったが、それでもまだ貯金が残っているので、⑨のフェイス軽減行為は、少なめであった。⑩で、さらに「断り」をせざるを得なくなった際は、ついに、貯金もなくなり、フェイスのバランスは、0より下がってしまう。その後、⑪では、それを埋め合わせるように、後日、フェイス軽減行為としてお詫びをすることに加えて、「なんらかのサービスを提供する」ことも行い、「フェイス充足行為」も行ったのである。この図では、話者は、再び、フェイス充足度をプラスのほうに持っていったということになる。そのほうが、今後も依頼などの「フェイス侵害行為」が相対的に行いやすくなると考えていると解釈できる。これは、あくまで継続する人間関係のフェイス均衡状態の「イメージ図」であるが、このような観点から、縦断的に収集した同じ話者同士の会話を分析することは、今後の課題として興味深い。

4. 今後の課題

以上、B&L のポライトネス理論を改めて振り返った上で、今後の新 DP 理論の展開を視野に入れて、「フェイス侵害度見積もりの公式」の修正案を提示するとともに、新 DP 理論の構想を示した。

ここでは、対照研究や日本語教育的観点を中心に、DP 理論とその適用研究について、今後取り組む必要がある課題を列挙しておく。

<理論的課題>

- (1) 今回新たに提出された話し手の「フェイス保存への欲求度 (DSF)」を加えて考える「フェイス侵害度見積もりの公式」をベースに、様々な実証研究を行い、検証する。
- (2) 「話し手のフェイス保存への欲求度 (DSF)」が、「聞き手のフェイス侵害度の埋め合わせ」より高い場合として「インポライトネス」を捉え、様々な事例分析を積み重ね、「インポライトネス」の体系化を行う。
- (3) インポライトネスの体系化の際は、「意図的なもの」と「非意図的なもの」を分けて考え、双方を総合的に解釈できるようにする。
- (4) 話し手と聞き手の見積もりのギャップ (De 値) と、それが生み出す効果 (図 1) のより具体的な数量化をめざす。(人工知能研究分野の研究者との連携)
- (5) 時間軸も含めて、「フェイス均衡原理」の数量化をめざす。(人工知能研究分野の研究者との連携)

<応用的課題>

- (1) 文化ごとに「基本状態」を同定して、それが異なることが生み出す効果や異文化間ミスコミュニケーションが生じる可能性や、それを未然に防ぐ方法の検討について

は、様々な研究がある程度蓄積されてきた。今後は、さらに一歩進めて、接触場面（母語話者と非母語話者の会話）における「基本状態」の同定法や、それを基にした特定の「有標行動」の効果についての質的、量的研究を行う必要がある。

- (2) 話し手のフェイス侵害度の見積もりの度合いに対応する具体的な言語表現を、主要場面における「発話のフェイス侵害度の調査結果」に基づいて整理・序列化し、言語教育に生かす。
- (3) 質問紙調査を活用して、聞き手の側から見た「ポライトネス効果」を尺度化する。
- (4) ポライトネス効果の尺度化の結果を踏まえて「対話システム構築」に知見を提供する。
- (5) 「対話システム」との会話の「基本状態」、すなわち、人間と対話システムやロボットとの会話の基本状態を同定することを目指す。

上記のように、新 DP 理論の展開は、まだまだ進行形である。今後の発展には、この分野において、数多くの先駆的研究成果をあげている中日対照研究からのさらなる成果が大きな役割を果たすことは間違いない。ここに、それに対する大きな期待を込め、『日語学習と研究』40周年へのお祝いの言葉に変えたい。

【引用文献】

<日本語>

- 宇佐美まゆみ(1993)「談話レベルから見た “politeness” : “politeness theory” の普遍理論確立のために」『ことば』14, 20-29.
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662, 27-42.
- 宇佐美まゆみ (2001a)「ポライトネスの談話理論構想」国立国語研究所(編)『談話のポライトネス』東京：凡人社, 9-58.
- 宇佐美まゆみ (2001b)「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」『東京外国語大学語学研究所論集』6, 1-29.
- 宇佐美まゆみ (2002)「連載ポライトネス理論の展開 1-12」『月刊言語』31, 1-13.
- 宇佐美まゆみ (2003)「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』54(3), 117-132.
- 宇佐美まゆみ (2005)「操作的定義」日本語教育学会(編)『新版日本語教育事典』東京：大修館書店, 620-621.
- 宇佐美まゆみ (2008)「ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11(1) (特集「敬語研究のフロンティア」), 社会言語科学会：4-22.
- 宇佐美まゆみ(2017)「ディスコース・ポライトネス理論の新展開—「時間」「フェイス充足度」「フェイス均衡原理」という概念を中心に—」漢日対比言語学研究会(編)『漢日語

- 言対比研究論叢』第8号, 125-139.
- 王玉明・聞芸 (2015) 「電子メールによる依頼行動に関する日中対照研究—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『東アジアへの視点』2015年12月号.
- 母育新 (2008) 『中国人日本語学習者に対する待遇表現の指導に関する研究』北京: 中国社会科学出版社.
- 母育新 (2011) 「依頼行動における中国人日本語学習者の問題点—ディスコース・ポライトネス理論の観点からの考察—」『日本研究教育年報15』東京: 東京外国語大学.
- 野村琴菜 (2017) 「日中接触場面の日本語依頼談話展開—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」漢日対比語言学研究会 (編) 『漢日語言対比研究論叢』第8号, 115-124.

<中国語>

- 李宇霞 (2014) 「用“礼貌原則”理論探討中日話題選択的問題—以燕山大学日語專業為例」『韶関学院報』2014年3月号.
- 時曉陽 (2014) 「話語礼貌理論視角下的日語拒絕行為研究」『日語學習与研究』第3号.
- 母育新 (2014) 『現代日語礼貌現象研究』杭州: 浙江工商大学.
- 母育新, 鄧永璋 (2010) 「基于話語礼貌理論的日語請求行為研究」『外語教育』第4号.
- 趙華敏 (2004) 「礼貌与日語的反駁言語行為」『日語研究第2輯』北京: 商務印書館.
- 張瀟尹, 熊紅芝 (2017) 「話語礼貌理論視角下的中日“請求—拒絕”行為对比研究」『浙江外国語学院学報』2017年1月.

<英文>

- Atsushi Fukada, Noriko Asato. Universal politeness theory: application to the use of Japanese honorifics[J]. *Journal of Pragmatics*, 2004(36).
- Brown, P. and Levinson, S. Universals in language usage: Politeness phenomena[A]. *Goody, E. N. Question and Politeness: Strategies in Social Interaction*[C]. Cambridge: Cambridge University Press, 1978.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Fukushima, S. (2002). *Requests and culture: politeness in British English and Japanese*. Bern, New York: P. Lang.
- Goffman, E. (1971). *Relations in Public: Microstudies of the public order*. New York: Harper Torchbooks.
- Goffman, E. (1972). *Interactional Ritual*. London: Penguin.
- Geoffrey N. Leech. *Principles of Pragmatics* [M]. New York: Longman, 1983.
- Lakoff, R. The Logic of Politeness or Minding Your P's and Q's. *Proceedings of the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Chicago*, 13-15 April 1973.
- Pizziconi, Barbara (2003) 'Re-examining politeness, face and the Japanese language,' *Journal of Pragmatics*, (35), pp 1471-1506.
- Slugoski, Ben, & Turnbull, William (1988). Cruel to be kind and kind to be cruel:

Sarcasm, banter and social relations. *Journal of Language and Social Psychology*, 7, 101-121.

Usami, Mayumi (1999). *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Doctoral Dissertation, submitted to Graduate School of Education, Harvard University, Cambridge, USA.

Usami, Mayumi (2002). *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo.

Usami, Mayumi (2006a). Discourse politeness theory and cross-cultural pragmatics. In Yositori, Asako, Tae Umino and Masashi Negishi (Eds.), *Linguistic informatics V: Studies in second language teaching and second language acquisition*. pp.9-31. 21st Century COE: Center of Usage-Based Linguistic Informatics, Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies (TUFS).

Usami, Mayumi (2006b). A preliminary framework for a discourse politeness theory: Focusing on the concept of relative politeness. *Studies in language sciences (5): Papers from the fifth annual conference of the Japanese society for language science*. pp.29-50. Tokyo: Kurosio Publishers.

¹ 主に英語で書かれた雑誌では、何度かに渡って特集が組まれた。(Multilingua 8 2/3, 1989; Journal of pragmatics, Vol. 14/2, 1990; Multilingua, 1993, 12/1; Journal of pragmatics, 21, 5, 1994 等)。1990年代後半になると、非印欧言語、特にアジアの言語文化におけるポライトネスを扱うには、文化的相対性をもっと考慮する必要があるということが声高に叫ばれ、その動きをまとめるかのように、1999年には、第1回 International Symposium on Linguistic Politeness: Theoretical Approaches and Intercultural Perspectives (ISLP 99)が、タイのチュラロンコン大学で開催された。そこには、開催国のタイはもちろんのこと、日本、中国、アイルランド、英国、スウェーデン、スペイン、ギリシア、オーストラリア、米国等々世界各国から、ポライトネスに興味のある研究者が集まった。そこでは、非西欧の視点、特にアジアの視点が強調され、B&Lの理論を越えなければならないというようなことが合言葉のように繰り返された。その前年の1998年には、英国の研究者を中心に Linguistic Politeness Research Group (以降 LPRG) が結成され、研究会や国際学会が企画・実施されるようになった。また、2002年には、the e-journal series, Working Papers on the Web, vol.3 が politeness の特集が組まれ、2003年には、Journal of pragmatics が、それまでの議論で整理されていなかった face の特集を改めて組む。また、2002年に、LPRGの主催で開催された International Symposium on Linguistic Politeness の発表論文の一部を編んだものが、Multilingua, 23 1/2, 2004 にまとめられ、2005年2月には、LPRGのメンバーを中心に、ポライトネス関連研究に特化する Journal of politeness research (Walter de Gruyter) が創刊された。2006年にも Multilingua, 25 3 が politeness を特集し、さらに2007年には、Journal of pragmatics 39 4 が、「アイデンティティ、フェイス、ポライトネス」という観点からポライトネスに関する特集を組んでいる。しかし、同時にこのころから、記述研究と理論研究派の二極化は進んでいくことになった。その後も、何度か politeness にかかわる特集は、組まれてはいる。Special issue of the Journal of Politeness, Sara Mills / Kate Beeching, Published Online: 2006-05-09, Journal of Politeness Research Language, Behaviour, Culture Edited by Grainger, Karen. Special Section on Im/politeness and globalization Edited by Maria Sifianou, Pilar Garcés-Conejos Blitvich Last update 9 May 2019 等。

-
- ² その内容の概観については、宇佐美 (1993, 1998, 2001a, 2002; Usami, 1999, 2002) を参照。
- ³ 「操作的定義」については、宇佐美 (2005) を参照のこと。
- ⁴ エレベータで乗り合わせた人に、日本人はあまり話しかけない(ネガティブ・ポライトネス重視)が、アメリカ人は、声をかける(ポジティブ・ポライトネス重視)のが、一種の典型例として話題に上ることがある。文化によって、特定の状況における「基本状態」が違ふことの好例であろう。この現象も、基本的に DP 理論で説明しようとするが、それには、マクロな観点からの「対人関係」の捉え方にも言及する必要があるので、本稿では、扱わない。尚、エレベータでの行動については、Goffman(1971:32)に興味深い記述がある。
- ⁵ この用語が最適かどうかは検討中であるが、取り急ぎ、ここでは、「改まり度(formality)」とは、少し異なるものとして捉える意味でこの用語を用いておく。
- ⁶ ここでは、社会的距離と心理的距離は、相互に影響するものと捉え、あえて区別せず、「社会的・心理的距離」として扱う。
- ⁷ Goffman(1972:19)に、既に ‘correcting the disequilibrium’ という概念が出されている。B&L(1987:236)も、ローカルな観点からのやりとりを例に、それを「バランス原理(balance principle)」として触れているが、彼らのポライトネス理論の中に位置づけ、体系化するところまでには至っていない。DP 理論においては、人間の相互作用をポライトネスに焦点を当てて捉えるが、そこにも、むしろ、どちらかと言うと、B&L よりも、Goffman に近いマクロな視点を適用していく。
- ⁸ B&L(1987:236)も、「バランス原理(balance principle)」として簡単に触れているが、体系化するところまではいっていない。